

## 子育て支援の現状について

2017.10.24 江刺保育園 遠藤清賢

### 1. 序文

子育て支援の現状について講義をします。子どもの保育、教育、そして家庭・家族の働き全般について考えます。はじめに時代を遡り、私たちの生活がどのように変化したのか検証します。そして、人間として我々は如何に生きるべきなのかを考えます。これらの検証にあたって日本の家庭、子どもたちの姿、社会の課題、保育施設、その事業の現状を報告し、子どもを育てることの大切さと、子どもの成長を支える保育の働きの重要性を確認します。

### 2. はじめに～日本社会の変遷～

今から30～50年位前は、結婚、そして子どもの誕生は家族にとって大きな喜びでした。家族は少なくとも祖父母、父母、子どもたちという3世代家族が普通の家族の姿であったと思います。一家族に子どもは少なくとも2～3人はいたと思います。それぞれの家族は、誰かが必ず家にいました。近所の子どもたちは集団で遊んでいました。このあたりはでも、その当時は近くに山や川があり、自然の中で自由に遊んでいました。その頃の子どもたちは地域ごとに集団となり、年上の子が年下の子に様々な遊びを伝え、そして子どもだけルールを決め小さな社会を形成し、遊びを工夫して活動を行っていました。この集団が子どもたちの成長に大きく寄与していたと思います。人間関係の基礎はこの時期に形成されていました。しかし、第1回の東京オリンピックが終わったところから、人々は都会に出て会社員として働く人たちが増え、核家族が急速な勢いで増加しました。そして子どもは急速な勢いで減少し始めたのです。地方においても同じような状況になり三世家族はなくなり、核家族に移行したのです。そして人々の心も変化し、特にプライバシーが尊重され、個人主義が当たり前の権利として守らなければならない社会になりました。その結果、地域社会の連携は失われ、個人の自由な生活は補償されましたが、家族内で問題が生じた場合、近所にある家族は誰も問題のある家族を援助しない社会になってしまいました。子育てにおいても昔は近隣から援助や助言が得られる社会でしたが、今の社会は個人の課題や他の家族の問題について他者が立ち入ることのない社会となってしまい、孤独のうちに子育てをしている保護者が多くなってしまいました。従って子どもを持ち、子どもを育てることは大きな喜びでしたが、現代社会は逆に子どもを育てることは経済的なリスクや精神的な苦しみを覚える社会に変化してしまいました。また核家族の急激な増加によって子どもを育てる時間は失われてしまいました。日本では保護者が自分の子どもと共に過ごす時間は非常に短いのです。平均して30分にも満たないのです。このような状況で子どもの成長を家族が支えることは徐々に困難な社会になってしまったのです。これらの社会の課題に真正面から立ち向かっているのが保育という制度なのです。保育園が、待機児童が多いのは、核家族になり子どもの育てている者も含めて家族全員が家を離れて仕事をしなければならないということ共に、どのように子育てをすればよいのか迷っている保護者が多く存在しているというのも一つの要因だと言えます。

### 3. 与えられた使命～未来へ予測を含めて～

私たちがこの世に生まれてきた使命とはどのような使命なのでしょう。本来生物学的に考えればこの世に生を与えられた者は、次の世代に命を繋ぐという使命があります。これは地球上の全ての生物に共通する本能であるはずですが、人間の意志は命を繋げるという意味は変化しているように思います。命を次の手代に繋げるというよりは、自分の命を如何に長く保ち、心地よい生活を維持させるという思いに変わってきました。今生きている地上の生物のほとんどは自分の命を削っても、新しく誕生した命を存続させ、守ろうとする本能的な意思があるのですが、人間は便利で合理的な社会に変化して、人間は命を継続しなければならないという意思は徐々に喪失しているように感じます。またヨーロッパのどこかの国での調査ですが男性の精子の数が徐々に減少しているのです。そう考えると人間は生物学的には退化の方向に進んでいるように思います。自分の命を、新しい命に繋ぐという本能を取り戻すことができるのかが大きな課題になっているのです。そして、その変化の要因はあまりにも人口が増え過ぎたことと、便利になり体を動かさない生活になったことがその要因であるように言われています。このままでは、地球環境が変動し、食糧が不足し、人間の精神は自己破壊し、生存競争によってただ生きることのみ社会になり、抗争の世界になってしまうことが予測されます。世界各地でテロや内戦がありその兆候はすでに表れているのかもしれませんが、人口がある程度減少することは大切な事なのです。日本は1億人の人口ですが7千万人から8千万人の人口が適切な人口であると言われています。そして各年代の割合のバランスが均等に取れていることが重要です。しかし、命を新しい世代に繋げなければならないという精神は失われてはならないのです。このために「命」とはどのようにあるべきなのかということ私たちはしっかりと確認する必要があります。

### 4. 人間としての生き方

本来人間はどのように生きるべきなのでしょう。そのあり方は時代によって変化します。今の日本の現代社会は個人の自由意思で他者に迷惑を掛けなければどのような生き方であっても許される社会になっています。この人間としてのあるべき生き方は、様々な思想家や哲学者によって示されていますが、それに大きな影響を及ぼしているのは宗教であると思います。仏教、イスラム教、キリスト教という正統的な宗教によって人間としての有り方が示されています。西暦はキリストの誕生が基準になっていてキリストの誕生した時が0年となっています。実際4年位の誤差があるようですが詳細は不明です。仏教はそれより500年以上前に成立しています。イスラム教は逆に約600年後に成立した宗教です。この中で共通するのは、人間はお互いに支え合って生きるものであるということです。仏教では慈悲の心、キリスト教、イスラム教は愛という言葉によって示されています。現在世界中で宗教の違いによって戦争が行われていますが、本来の宗教は全て平和を希求する宗教です。これは原理主義という自分が信じる者以外は受け入れないという人たちが自分の思想を他者に強要するために起きている争いです。戦争の原因は宗教自体にあるのではなくそれを本来の意味からかけ離れた信仰を持っている人間たちによって引き起こされているのです。仏教、イスラム教、キリスト教は世界の三大宗教になっているのは、人間がより良く生きるために理にかなった教えであり、人間にとって平等であり優しい宗教であるから世界中に広まっているのです。現在イ

スラム教徒がISによって誤った情報が流され、イスラム教徒の全てが悪者のように見られているのは非常に悲しい事です。仏教ではミャンマーのロヒンギャ族が仏教徒によって迫害を受けています。中東ではキリスト教、ユダヤ教、イスラム教が争っています。人間を幸福にするためにそれぞれの時代で育んできた宗教ですが、その宗教が人間を不幸におとしめているのは人間自体が、どのように生きるのかという本質を理解できないからです。多くの人間は本当の神様を理解しようとせず、自分の都合に合わせ、神を自分の欲望によって変えてしまっています。貨幣の多い少ないによって世界の経済成り立っています。現代社会において人間が心から信じられるものは、貨幣になっているのです。貨幣の多い少ないによって人間の生活の良し悪しがほぼ決定する社会が今の社会です。この貨幣をできるだけ多く獲得するために人間は働いています。貨幣を多く自分のものにするのが人間の人生の目的となっているようです。生活に於いて経済的に自立することは大切な事ですが、人間として生きる正しい方向性を示してくれる本当の神を見失い、貨幣を神のように崇め信奉しているのです。本来あるべき人間としての生き方を私たちは見失い、忘れてしまったように思います。

## 5. 自然な生き方とは

人間として自然な生き方とは「お互いに支え合って生きる。」という生き方です。キリスト教的に言えば「互いに愛し合って生きるのが人間である。」ということです。しかし、現代社会の私たちは競争によって人よりもより多くの貨幣を獲得することを目的として生きているように思っています。受験や良い大学を卒業し、良い職業について、競争に勝って良い地位を確保し、多くの収入を得て、良い生活をするというのが、平均的な人の願いだと思います。私たちは競争に勝たないと良い生活は出来ないのだ、多くの貨幣を自分の物としなければ良い生き方はできないのだと誤って思っています。しかし、よく考えて見ますと私たちの生活や仕事はどうなのかと言えば、ほとんどの働きは自分の為ではなく、他者の生活の為に働いていることに気付くと思います。農業は他者の為に食べ物を生産します。工場の製品も他者の生活に必要な物を製造する働きを行っています。自動車工場、お店などの働き、学校の教員、幼稚園の教諭、保育士、等、自分の為ではなく、その働きは他の人たちの生活を支え、命を守る働きを行っているのです。家族の中でも同様です。祖父や祖母が仏壇に向かって祈るのは、家族の安全と健康を願うことであり、お母さんたちが家事を行うのも家族のためなのです。私たちは一人で生きているのではなくお互いに愛し合い、支え合って生きているのです。競争をしてより多くの貨幣を自分の物にしようとするのではなく、力を合わせ協力して生きているのが本来の人間としての自然な生き方なのだと思うのです。私たちはこのことを忘れてしまったように思います。それだけ生活するのに精一杯の状況であるからだと思います。

## 6. 命について

私たちがこの世に生まれてきたのは、新しい世代に「命」繋げるために生まれてきたのだと私は考えます。全ての地球上の生き物は命の継承をすることが本能付けられています。命とは生きているということだけではなく、その個人の行動や言葉、考え方、生きている姿、全てを命と捉えています。保育という働きは「命」を伝える働きです。ですから「命」を伝える者が自分の「命」とはどのような物であるのかを捉えていなければ「命」を伝えることができないのです。私たちの人間

の「命」とは、人間として生きるために必要な行動であり、精神であり、思想であり、信念・信仰なのだと思えます。子どもたちに人間としての生きるための、その人なりの「命」を伝える働きを保育と言うのだと思うのです。生きることと死ぬことは繋がっています。死を受け入れることが人間として生きるために、より良い人生を全うするためには必要不可欠な事なのです。自然な死は決してあってはいけないことではなく、生きるために必要な出来事であることを受け入れなければなりません。

今まで人間の生き方、社会の姿を考えてきましたが、これらの事柄は子どもたちをどのような人間に育てなければならぬのかを考える上でとても重要な事なのです。

## 7. 家族の在り方

子どもたちが成長するために、家族の存在は絶対に必要なのです。家族によって人として生きることの基本が伝えられてきました。言葉の獲得、家族の愛情によって得られる安心感や情緒の安定、生きるために食事、休息の場所、健康を維持するための生活環境、等、全てが家族によって子どもたちに用意されていました。この家族からの豊かな愛情が、自分は愛されている、大切な存在であるという基本的な信頼感を獲得させ、生まれてきたことが良かった、今を生きることを心から楽しんでいる、自分は此処にいることが幸せであるという自己肯定感が育まれてきました。この家族の働きは子どもの精神的な安定の基礎となり、他者との良い人間関係の基盤となるのです。そして、自分が心から安心し、心から信頼できる人の存在が、愛情形成の基盤になるのです。

## 9. 家族の現状

子どもの成長にとって家族、家庭の存在は非常に重要です。しかし、この家族の働きが近年失われつつあるのです。乳幼児の子育てについて不安を抱えている人が非常に多くいるようです。ほとんどの家庭では母親が就労を希望しており未だにたくさんの待機児童が存在します。奥州市でも0歳児の途中入園が多く、町場にある保育施設は応じられない状況になっています。保育園では2ヵ月から受入が可能になっていますが、0歳児を自分たち家族の力で育てたいと思っても、自分で育てることが出来ない現状があるのだと推測します。働かなければならない社会状況が今の日本なのだと思います。このような社会がはたして豊かな社会であると言えるのでしょうか。0歳児がしっかりと自分の母親や父親と共に過ごすことができる十分な時間を共有することができる社会になっていないのです。今の社会は子どもたちの成長を犠牲にして成り立っている社会なのだと思います。従って、子どもたちを犠牲にするのではなく、子どもたちの為に保育施設や子育て支援事業はその重要性がますます大きくなっています。

## 10. 子どもたちを取り巻く様々な問題

### 10-1. 孤独な日常生活

子育ては、普通一人で行うことではないのです。特に初めて子どもを授かった母親は、誰かが支える人が必要です。実際、以前は子育ては家族が力を合わせて行う共同作業でした。しかし、核家族になり子育ての負担は母親一人がすべてを背負うような社会になってしまいました。人間が長生きできるようになった一つの要因は子どもを育てることを援助するために寿命が延びたという生物

学者がいました。しかし、現代社会は、そのような援助ができない状況になっています。従って、初めて子どもを持った母親は不安の中で孤独な生活を続けなければならないのです。子どもの声が聴こえず、子どもの訴えを理解できず、自分を苦しめるために子どもが誕生したような感覚を持ってしまうのだと思います。そのような母親に、父親の支えや祖父母の支え、子育て経験のある友人等の援助が必要です。そして保育園や子育て新事業に参加し出来るだけ孤独な時間を少なくし、何か生活の楽しみを見つけ出すことが必要です。

## 10 - 2. 児童虐待

孤独な生活をしている母親の中には、この状況に耐え切れず自分を苦しめているのは自分の子どもであると思ってしまいます。そして力付くで、泣き叫ぶ子どもを黙らせるとか、子どもの訴えを無視し、子どもの世話の一切を放棄してしまう虐待もあります。中には、子どもの存在そのものを疎ましく思いついには抹殺してしまう親もいるのです。毎日のように子どもたちの命が失われています。児童虐待の報告は毎年増えています。児童虐待の意識が高まったから、虐待の報告が増えていると総括していますが、意識が高まったなら虐待は減少するはずですが現状はますます悲惨な状況になっています。

児童虐待の定義、種類は以下の通りです。

### ▶ 身体的虐待

児童の身体に外傷が生じ、または生じる恐れのある暴行を加えること。

殴る、蹴る、投げ落とす、首をしめる、溺れさせる、逆さずりにする、タバコの火を押し付ける、毒物をのませる、戸外に締め出す、などの行為

### ▶ 性的虐待

児童にわいせつな行為をすること、また児童をして猥褻な行為をさせること。

子供への性交、性的行為の強要、性器や性交を見せる、ポルノグラフィーの被写体に子供を強要することなど。

### ▶ ネグレクト

児童の心身の正常な発達を妨げるような著しい減食または長時間の放置、その他の保護者としての監護を著しく怠ること。

家に閉じ込める、病気や怪我をしても病院へ連れて行かない、適切な食事を与えない、ひどく不潔なままにする、自動車内や家に置き去りにするなど。

赤ちゃんは自分の意志を泣いて訴えますが、ネグレクトされている赤ちゃんは何も訴えなくなり、当然泣くこともしなくなります。

### ▶ 心理的虐待

児童に著しい心理的外傷を与える言動を行うこと

言葉によるおどし、脅迫、無視、兄弟間の差別的な扱いなど。

虐待を体験した児童は自分が大人になった時、同じように自分の子どもを虐待してしまうことが有ります。虐待の連鎖と言います。虐待されている児童の特徴として以下のようなことが揚げられます。

## 児童虐待体験者の心理状況

- 虐待を受けた子どもの行動の特徴として、新しい大人に対して、強い愛着行動をしめします。これは大人からの攻撃を最小限にとどめようとするためです。大人から「…したらだめ」などの行動制限を受けた場合、これから始まる虐待を予想し、自分の身を守るために、大人からの距離をとる。極端な愛着と極端な離別行動を取るのですが、いずれも、虐待から自分を守るための行動です。正反対の行動が表裏一体で繰り返されるのだそうです。
- 通常、子どもは、母親、父親から離れると泣きます。愛している人からの分離にたいして、何らかの反応を示すのですが、虐待を受けている子、受けた経験のある子は、何の反応も示さないのだそうです。反応することによって虐待を受けることからの、防衛反応であるということです。
- 虐待関係は反復傾向があります。虐待の中で育った子どもは、自分でも他者に対して攻撃的な行動をする傾向が強くなるということです。このような子どもたちは、人間関係は、お互いに傷つけあう関係であるという環境で育っています。また、親に対して攻撃的な感情を絶えず抱いていますから、対人関係においてその攻撃的な感情を持ち、対応してしまうのです。ですから、社会に出ても、自分の経験した虐待関係を再現してしまうのです。自分が子どもを持ってしまったとき、自分が受けた虐待を同じように自分の子どもを虐待してしまうのです。不幸がさらに不幸を生み出してしまいます。
- 高い攻撃性があります。虐待を受けた子どもは無力な存在です。この無力感と絶望感を、自分の親と同一化して攻撃を受ける立場から、攻撃をする立場に変化させ、圧倒的な無力感から回復しようとするのです。大きくなったとき、何か問題が発生した時、攻撃とか、暴力で解決しようとしません。親密な親子関係の中で暴力的な生活を長い間送ってきた子どもは、親密な関係の中で、特に暴力的になる傾向が強くなるのです。結婚する前は優しくった人が結婚してから急に暴力的になってしまうというケースは、親密な関係の中で虐待を体験してしまった人に見られるのでは、ないでしょうか。DVをしてしまう傾向が強くなります。
- 虐待を受けた子ども、特に言葉による虐待を長い間受けてしまった子は、親から「お前は悪い子だ。」「これは、おまえを良くするための躰だ」「お前は、生まれてかないほうが良かったのだ。」等のような言葉を日常茶飯事に浴びて大きくなります。そのような子どもは本気で自分は悪い、駄目な、価値のない人間としてしか自分を見ることができなくなってしまいます。全てにおいて不安と絶望の中で生きてしまうのです。
- 虐待を防衛する手段として、無意識に自分の思いを犠牲にして、周囲の大人の感情や欲求、期待に、敏感に反応し、それに応じた行動をとることがあります。
- 性的虐待を体験してしまった場合、年齢にそぐわない性的な関心、行為、性的な意味合いを持たせる行動をとります。子どもが大人との関係を性的なものと学習してしまい、このような行動をとってしまうこともあります。援助交際や若年層の売春は、性的虐待を体験してしまったケースが多くあるとのこと。この性的虐待は、様々な性機能障害として出現します。性にたいしての恐怖心、嫌悪感が根底にあり、パートナーとの人間関係において不信感と過剰な依存が表裏一体で現れます。その結果、性的虐待を経験した人の人間関係は、複数であり、短時間であり、表面的といった特徴を示すことになります。また、記憶の欠損や多重人格などの解離障害が見られます。
- 保育施設ではあまり聞きませんが、施設の職員が利用者に虐待するケースもあります。お年寄りの

施設や障害者の施設では利用者の命を奪ってしまう事件が報告されています。保育施設においても十分に注意しなければなりません。

### 10 - 3. 貧困

ここでいう貧困とは相対的貧困の状況にあることを言います。衣食住において何もなく、生きることが非常に困難な状況にあるというのではなく、日本人として平均した生活状況と比較し、平均した普通の生活ができないという貧困のことを言います。日本では全世帯の15%くらいがこの相対的貧困状態にあります。具体的には一世帯の年間収入の平均は245万円でその1/2以下で生活している世帯は相対的貧困状態にあると言われていています。金額にすれば相対的貧困家庭の所得年額は122.5万円位です。日本は世界で7番目の貧困国家なのです。特に母子家庭がこの相対的貧困の状況多くなっています。具体的にはその世帯の子どもが修学旅行に行けない、給食費を払えない、1日3回の食事ができない、希望する高校や大学に進学できないという状況です。乳幼児期は子ども・子育て支援制度によって家庭の経済状況にあまり影響を受けませんが、小学校、中学校に進むにすれて家庭の経済状況が大きく影響してくるのです。従って、貧困の状態になってしまうと高校や大学に進学ができず、貧困を解消できるような高収入の働きができない状況になってしまい、貧困状態から抜け出せなくなってしまいます。ワーキングプアといっていくら働いても苦しい生活から抜け出せないのです。このためには高校の無償化、給食費の無償化等の対策が必要なのです。

### 10 - 4. 食事の問題

子どもたちの食事が大きな変化しています。食事の内容、食事の環境、食事の意識、等、食事が命に直結した営みである言う意識が失われています。特に子どもの食事について、それを支えている大人たちの意識は低下しています。食事に関する教育は義務教育のもとではほとんど行われていないのが現状です。食の教育は家族が子どもたちに伝えてきました。50年位前は家庭の味が子どもたちにしっかりと記憶されていたのですが、今の子どもたちは家庭の味について記憶できるほど食事の重要性を意識していないように感じています。コンビニやスーパーのお弁当が食事の中心になりつつあります。本来あるべき子どもの食事について真剣に取り組んでいるのは保育園だけになってしまいました。栄養のバランス、食事の作法、命の連鎖、守らなければならない自然環境、など食事に関連した重要な知識や知恵が伝えられなくなっているのです。保育園はこれらの重要性を子どもたちに伝えています。調理された食事は目に見える愛情表現であるのです。調理された食事から想像されるメニューイメージが多くの人たちの働きによるものであることを伝えなければなりません。最近、特に目立つのはアレルギーのある児童の増加です。この子どもたちにアレルギーの原因となる食材を除去し、代替の食材を用意します。偏食を改善し、何でもおいしく食べることができるような食事教育を行っているのです。体の健康は正しい食事が基本なのです。食事の時間が一日の楽しい時間であるように保育園は栄養士と保育士が連携して食事の教育(食育)を行っています。

両親の就労や貧困、虐待等の原因により本来のあるべき食事ができない子どもたちが、多くいるのです。この子達の為に「子ども食堂」と言う取り組みも始まっています。この事業は問題を抱えている家族、それ以外の家族でも、バランスのとれた子どもたちにとって必要な食材によって調理された食事を無料又は安価な金額で食べることができる食堂です。普通の家庭の親子も多く利用さ

れているようです。岩手県では盛岡のNPO法人が取り組んでいます。私たちの江刺保育園も将来実施できればと考えています。

## 10-5. メディアの影響

最近見逃せないのがメディア機器の存在です。子守をさせるために安易に子どもにゲームやタブレット、スマホをあたえる保護者がいますが、これは子どもにとって特に乳幼児の子どもたちには非常に有害な物なのです。メディアから流される情報は一方的な流れの情報で、応答ができないのです。家族や保育者との会話はお互いの反応を見て、又は聞いて応答します。これによって他者の心を想像し、思いやりの心が育つのです。ゲームやスマホばかりの画面から流される情報ばかりを見ていると対人関係に必要な能力が育たないのです。特に長時間メディア機器を使いゲームをすることで子どもたちの脳の機能が壊れてしまうのです。これらは乳幼児には与えてはいけないものです。小学生でも何時間もゲームをしてしまう子どもたちの脳波は覚せい剤を使っている脳波と同じような波形になってしまい通常の生活ができなくなってしまうのです。子どもたちの姿も、生活意欲が無い、すぐに疲れる、物事を最後までやり通すことができない、忍耐力が無い、昼夜逆転、不規則が食事時間、等の原因は長時間のゲームやスマホの使い過ぎが主な要因になっています。

## 11. 保育、子育て支援事業の働きについて

日本の社会は一見豊かな社会に見えますが、実際は多くの問題が存在しています。これらの社会的問題に真正面から立ち向かっているのが保育施設なのです。子どもの成長を支えることで家ではなく、その子どもたちの家庭の問題についても保育施設として支えているのです。保育士は子どもの成長を支えるために、自分の持っているありったけの愛情を注ぎ、家族の生活を支えています。その働きは保育以外にもケースワークやグループワーク等のソーシャルワーカーとしての働きが求められるのです。小学校、中学校の教諭と比較しても保育士としての働きは非常に尊く重要な働きを担っているのです。

孤独な生活環境で苦しんでいる母親の話を傾聴します。そして母親を傷付けないように今の姿を受容しながら必要な事を伝えます。話が出来ない時は、お便り帳に今日の出来事、子どもの様子を書き成長の様子を伝えます。出来るだけ気軽に保護者が話しができるように、保育者は生きていることを楽しんでいる姿を表現しています。現代社会は心を病んでいる方たちは非常に多くいるのです。

子育て支援事業は、原則として施設を利用していない保護者の方々が利用する事業ですが、私たちの江刺保育園は特に利用することに関して制限していません。他施設を利用している方や様々な方たちが利用しています。その中で同じように孤独な状況で子育てに悩み、迷っている人達がお互いに語り合い、子育ての苦労を共有することで心の重荷を軽くして頂くとか、多くの友人を作り、皆で楽しめるサークル活動を実施しています。保育園として持っている子育てのノウハウや、保育や施設等の情報等を伝えます。子育て以外の個人的な問題を抱えている方の話も傾聴し、必要な場合は専門の機関に繋げること等が、子育て支援事業の主な働きです。多くの利用者は子育てについての悩みよりは、家庭生活上の悩み、人間関係等の悩み、夫婦間の悩み等の方が多いようです。時折、ミニ遠足や食事会なども行っています。



子育て支援事業に関連した事業が多くあります。ファミリーサポート事業は会員制で一般の家庭が、子どもの見守り等を必要としている方にその必要な時間子どもを預かって頂ける事業です。

病児保育事業は入院以外で熱や体調不良のため保育園を利用できない時、その病気の子どもを預かる制度です。奥州市は水沢病院に「こぐま園」があります。保育園でも看護師が常勤している保育園では体調不良や熱で保育ができなくなり、家庭で見守らなければならない時、迎えに来るまでその子を見守る体調不良型病後児保育事業を行っている施設があります。

最近、乳幼児とお年寄り、又は障碍のある方などが一体となった事業(ダブルケア)が行われています。その他、様々な事業が展開されています。

## 12. 保育施設の現状

平成 27 年度から保育制度が変わりました。子どもたちを 3 歳以上と 3 歳未満児に区切って 1 号認定、2 号認定、3 号認定として分類し、この分類によって利用する施設が決定されます。平成 27 年より幼稚園、保育園、従来あった施設に加え幼保連携型認定こども園が新しく誕生しました。幼稚園は 3 歳以上で 1 号認定の子どもたち、保育園は 3 歳以上の 2 号認定、3 歳未満の 3 号認定の子どもたちが利用し、幼保連携型認定こども園は 1,2,3 号認定の子どもたちが利用できる施設になっています。3 歳未満児と 3 歳以上児と区別され、3 歳以上児は学校教育を受けることが法律として決められました。保育園を利用するにあたり以前は両親が共に就労などによって子どもを見守ることができない状況にあるという「保育欠ける」という条件が有りましたが、現在は「保育の必要な児童」「必要でない児童」として区別されています。母親が就労していなくても資格取得のため、出産のため、その他就労できない状況にある場合、以前より利用に関する条件は緩和されています。また短時間のパートであっても短時間保育として 8 時間の保育利用が可能になり、より利用しやすい制度になっています。また保育園、幼稚園、認定こども園の保育、利用料は世帯の収入によって保育料が決定され、生活保護や収入が少ない世帯は無料または安価な保育料になっています。このことにより子どもたちは家庭の経済状況に影響されず、多くの子どもたちが平等に保育を受けることができるのです。そして、施設を通して様々な支援を受けることができるのです。この制度は家庭の子育て力が失われてしまった日本に於いてはとても大切な制度になっています。以前政権にあった民主党の政策として乳幼児の保育料の無償化が検討されていましたが、自民党によってばらまき政策として反対され廃案になりましたが、今の自民党によってふたたび乳幼児の保育料の無償化が検討されています。これは今の日本社会においては必要な政策だと思いますが、単に政府の選挙の人気取りの為に行うのではなく、真剣に子どもたちの成長に必要な施策として取り組んでいただくことを希望します。

都会では保育園不足と保育士不足が重なって待機児童が多く発生し、保育園を利用できない方が多くいますが、地方に於いては少子化によって定員を満たすことができず閉園する施設が多くなっていることも事実なのです。とくに公立の施設は減少しています。少子化が今以上に進んでしまうとこの施設でも定員を満たすことができなくなり経営が困難になり閉園しなければならない施設が多くなることが予測されます。同時に保育士が過剰になり人員整理をしなければならない保育施設も多くなると思います。このような状況が続いた時、子どもたちの成長をどのように支えることになるのか不安を感じます。しかし、近い将来このような状況になることは避けられないと思いま

す。保育事業だけの施設の存続は難しくなると思います。保育だけではなく、保育以外の事業を行う複合型保育事業施設への移行が進むかもしれません。

### 13. あるべき保育の有り方

乳幼児期の保育は非認知的能力を高める保育を行っています。非認知的能力というのは目に見えない能力です。具体的には、最後まで続ける能力、忍耐力、思いやり、感情を制御する能力等を非認知的能力と言っています。逆に認知能力とは文字を書く、数を数える、計算する等、主に知識を向上させる能力のことを言います。学力向上の為に乳幼児期から早期教育が必要であるという考えによって、早期教育を行う幼稚園や保育園が増えました。また制度が新しくなり3歳以上児は学校教育を施すことが法律として決められたことで、保育施設でも数や文字を教える認知教育を実施する施設が増えたのです。しかし継続的な知能検査を行った場合、早期教育を受けた直後は認知教育を施した児童は高い点数を得られるのですが、小学校高学年になると認知能力を向上させる早期教育を受けた、受けないに関わらず同じ点数になることが確認されました。それよりも非認知的能力を向上させる保育を受けた子どもたちと受けない子どもたちを長期に渡って調査した結果、非認知的能力を向上させる保育を受けたグループの方が経済的に豊かで、自立した生活をおくることができているということが確認されたのです。これによって世界の乳幼児の保育や教育は非認知的能力を高める保育にシフトしているのです。保育は心の成長を支える働きです。お互いに支え合い、力を合わせて生きることによって私たちの人生はより良いものになることが確認されています。私たちの保育施設は昔から非認知的能力を向上させる保育を行っています。改めて私たちの保育は誤りが無かったことを確認できるのです。新しい保育指針ではこの非認知的能力を育む保育について記述されています。

### 14. 子どもたちの未来

私たちの未来は子どもたちの成長に託されています。保育は命を繋ぐ働きです。命はいかに生きるべきかという信念であり精神です。そして、私たちの生きているありのままの姿です。保育士は子どもたちに命を伝えるために自分の命がいかなるものであるのか、どのように生きる者であるべきか、自分自身を表現できる者でなければなりません。この命を持っていなければ子どもたちに生きることを伝えることができないのです。保育の働きは尊く、大切です。そして私たちの生き方は、子どもたちの生き方に大きな影響を与えます。そのために保育を行う者としての責任と覚悟を持たなければなりません。そして、何よりも今の自分の人生を楽しむものであるべきです。生きていることに心か感謝し、自信を持って自分の素晴らしい命を表現できるものであるべきです。

この子供の成長を支える働きを楽しむことができる方は大きな喜びがあります。そして、子どもたちは私たち保育を行う者たちをいつでも心から励まし応援してくれているのです。